

実際に自分で教材を作るのは、初めは大変です。中級にもいろいろな総合型教科書がありますから、まず、それらをそのまま使ってみましょう。そして学習者の言語生活に合ったものに、学習者と相談しながら調整していくといいと思います。

4

新しい教育方法とその活動例

最後に、新しい教育方法をいくつか紹介します。これらは中級だけではなく、基本的にどのレベルでも使える方法です。しかし、総合型教科書を使うことが多い初級より、教え方の自由度が高まってくる中級以降で検討することが多いと思われます。どの教育方法も、学習者がそのことばが話されているコミュニティでの参加の度合いを強くしていくうえで優れています。みなさんの実践に取り入れることを検討してもらいたいと思います。

4-1 TBLT (Task-Based Language Teaching)

TBLTは、語彙、文法、音声などの言語的要素の定着を主な目的とした教授法とは異なり、「タスク」を基盤とした言語教授法です。オーセンティック(本物)な言語場面を使用し、学習者に目標言語を使って意味のあるタスクをさせることに重点を置いている教え方です。たとえば、病院に行く、インタビューをする、カスタマーサービスに電話をするなどのタスクです。TBI (Task Based Instruction) とも呼ばれます。この章で紹介したホームステイに関する教材(図2、図3)はTBLTに相当します。

4-2 内容統合型言語学習 (CLIL; Content and Language Integrated Learning)

CLILの主な特徴は、4つのCで表されます。学習内容(Content)の理解に重きを置き、学習者の思考や学習スキル(Cognition)に焦点を当て、学習者のコミュニケーション能力(Communication)の育成や、学習者の文化(Culture)、あるいは相互文化(Interculture)の意識を高める点にあるといわれています。以下がCLILの具体的な特徴です。

- ①内容学習と語学学習の比重は1:1、②4技能(読む・聞く・書く・話す)をバランスよく統合して使う、③タスクを多く与える、④さまざまなレベルの思考力(暗記、理解、応用、分析、評価、創造)を活用する、⑤協同学習(ペアワークやグループ活動)を重視する、⑥異文化理解や国際問題の要素を入れる、⑦オーセンティックな素材(新聞、雑誌、ウェブサイトなど)の使用を奨励する、⑧文字だけでなく、音声、数字、視覚(図版や映像)による情報を与える、⑨内容と言語の両面での足場(学習の手助け)を用意する、⑩学習スキルの指導を行う。(和泉ほか2012)

日本語教育では、貧困問題などの国際問題をテーマにした実践が紹介されている『日本語教師のためのCLIL入門』(凡人社)が参考になります。

4-3 対話的活動

対話的活動は、細川英雄氏が提唱する活動型の言語教育方法です(細川2019)。学習者が持つあらゆる言語資源を使い、ホリスティック(全人的)にコミュニケーションをおこなうことをトランスランゲージング(Translanguaging)といいます。これを重視して活動すれば初級からできます。自立した日本語使用者へと進む過程で取り入れるということなら、中級でおこなうのがいいかもしれません。この活動は、ことばの学習としても意義がありますが、自分がどのように社会と関係を持って生きていきたいかについて仲間や社会と対話しながら考えることができる、つまり「一人ひとりがよりよく生きていく(well-being)」のための言語教育活動としても意義があると思います。

活動の流れに特に決まりはありませんが、大体以下のような流れです。

- 1) クラスで自分の興味関心について話す。
- 2) 1)で話した内容を文章(動機文)にまとめる。
- 3) 動機文についてクラスメートと対話し、動機文を書きなおす。
- 4) 書きなおした動機文をさまざまな人に読んでもらい、その内容について自分にインタビューをしてもらう。インタビューは録音する。
- 5) インタビュー内容を文字化し、その内容について自分の考えを書く。
- 6) インタビュー結果をクラスメートと共有し、さらに対話する。